
Absolute Zero 2nd

DoubleS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Absolute Zero 2nd

【Z-ノード】

Z4900Z

【作者名】

Doubles

【あらすじ】

冬休み前に降りかかってきた問題をなんとか解決して、三条霧矢は家に帰ってきた。しかし、またしても問題が起こる。魔族がらみのトラブルにまた巻き込まれた霧矢のクリスマスはどうなるのか？

帰つてみれば怒る腐女子あつ（前書き）

「」の小説は *Absolute Zero* の続編です。未読の方はまず先に前作を読まれることをお勧めします。

帰つてみれば怒る腐女子あり

十一月十一日 土曜日 晴れ時々雪

「きいりいやああああ……」

「さあんじいよおおお……」

「𠂊」ころに家に帰つた三条霧矢は一人の友人に詰め寄られていた。

「あたしたちを置いて行くなんてどういうこと!」

一人とも指をバキバキと鳴らしている。霧矢は冷や汗を浮かべながら後ずさりした。

「ちょ、ちょっと、落ち着け……一人とも……」

「つるせえ! 黙れ!」

「とりあえず死になさい!」

「ぎいやああああ!」

薬局に悲鳴がこだまする。

一人が怒つているのには訳がある。霧矢が一人を置き去りにして物事を解決してしまつたからだ。もつとも、この二人も霧矢が誘つても起きようとせず寝落ちしたのだが。

よつてたかつて霧矢を袋叩きにしている一人の名前は、上川晴代、西村龍太といふ。

「霧矢、焼き殺される前に何か言い残すことは?」

晴代の右手が赤く光る。

上川晴代は本来、何の変哲もない女子高生だつたが、魔族という異世界からやつてきた存在と契約を交わしたことで、火の属性の術を操ることができるようになつた。具体的には手で振れた物体を數千度まで熱することができるというものだ。

ちなみに、西村龍太は特に契約を交わしていないため、何の能力

も持たない。霧矢も同様である。

「ちょっと！ 契約異能はマジでシャレにならないって…」

「黙りなさい。風華ちゃんに会おうと思つていたのに、ここにいな
いし、雨野先輩も有島先輩もいないじゃない……」

こめかみに筋を浮かべながら、晴代は近寄つてくる。彼女の右手
では空気が熱せられてゆらめいている。

「霜華！ 何とかしてくれよ！」

霧矢は助けを求めるように、脇に立つている和服を着た少女に懇
願する。彼女の名前は北原霜華といい、魔族と人間のハーフである。
水の力を操り氷の術が使える、自称半雪女である。

「…まあ、晴代もそこまでにしてあげたら？」

「……霜華ちゃんがそういうのなら……まあ勘弁してあげるわ」

霧矢は息を吐き出した。命を取り留めてほつとしている。

北原霜華は一見、温和な女の子として振る舞つているが、実は冷
血無慈悲な存在として魔族の中では恐れられている。殺した魔族は
数知れず、その冷酷さから絶対零度 アブソリュート・ゼロ とい
う通り名まで持つてている。しかし、そのことを知つてるのは、こ
ちらの世界では霧矢と彼女の妹である風華、そして光の魔族のハ
フであり、霧矢の先輩で生徒会副会長、有島恵子だけだ。ちなみに彼
女が晴代の契約魔族である。

向こうの世界で魔族が際限なく繰り広げる内戦による殺戮に辟易
して、霜華はこちらの世界にやつてきた。そして少し遅れて妹の風
華もやつてきた。

ちなみに、風華は偶然、有島の親友である生徒会長、雨野光里と
契約した。そして霧矢にはなつていない。といつても、出会つて
からまだ半日くらいしか経つていない。

とはいっても、風華は同じく出会つてから半日くらいしか経つて
いない雨野に対してもうついていいる。霜華以上かもし
れない。

「ところで二条。結局、護は田覓めたとしてこれからどうするのだ」

固い口調でしゃべる眼鏡の女が一人霜華と一緒に立つていた。

彼女は木村文香といつて、霧矢の通う県立浦沼高校の科学部員だ。晴代の親友で霧矢も中学校の時から彼女とは面識がある。

ただし、人に対する毒を盛つたり、対人兵器を開発したりするのが難点である。

「……どうするって言つてもな……それは会長が決めることだろ？」

雨野には護という弟がいて、彼は長い間眠り続けていた。それが発端で霧矢たちはいろいろと面倒事に巻き込まれていた。つい数時間前に風華との契約異能で雨野が彼にかかっていた呪いを解いたのだが、それに際して、晴代と西村の二人を完全にスルーする形になってしまったので、こうして詰め寄られていたというわけである。

「とりあえず、風華に会いたいなら、もうしばらくしたら来い。昼になつたら帰つてくるだろ」

「…………きいりいやあ…………」

イライラした視線で晴代は霧矢を凝視している。霧矢は無視し、エプロンを身に着けた。

「とりあえず、遅れたけど復調園調剤薬局は営業開始。用がないなら帰れ」

レジカウンターの椅子に霧矢は腰を下ろした。しかし、晴代は霧矢に詰め寄つてくる。

「ねえ、あたしへの感謝の気持ちはないわけ？」

「ない」

「あ、そう……」

霧矢が無表情で即答したため、晴代の怒りは沸騰した。再び、右手が赤く光る。

「霧矢、もう一度だけ聞くわよ。あたしへの感謝の気持ちはないの

？」

霧矢はため息をつく。霧矢としては、ちゃんと誘ったのに眠いと言つて断つたのは誰だという思いが強かつた。

「焼き殺される前に、逆に聞くぞ。もし僕を焼き殺す気なら、霜華と西村の二人にお前の秘密を全部ばらすぞ。それでもいいのか？」特にこの前の日曜日のこととか

晴代がギクリと動く。一人は何のことやらと首を傾げた。

「……そ、それは……」

「」のことは学校では霧矢と文香しか知らない。

上川晴代は重度のオタクである。いや、授業中に漫画の男性キャラと男性キャラを組み合わせる妄想を繰り広げるほどである。詳しく述べは霧矢としても説明したくない。

「用がないなら帰れ。風華が帰つてきたら連絡するから」客向けのおまけのポケットティッシュを投げつけると、霧矢は新聞を広げた。晴代は震えている。

「霧矢のバカアアアア！」

涙ぐみながら、晴代は乱暴に店の戸を引くと駆け出して行つた。

霜華は唖然として銀色の道を走り去る晴代を見ていた。

「なあ、三条。上川の秘密つて何なんだ？」

「それは聞かないであげてくれと、親友として頼みたい」

文香が残念そうな表情を浮かべて、西村の問いを遮つた。丸眼鏡が太陽の光を反射して、白く光つている。

「で、どうするんだ。お前ら。お前たちは晴代と違つて家は遠いから、会長が帰つてくるまでじつやつて時間を潰す気だ？ それとももう帰るのか？」

新聞の一面記事を眺めながら霧矢は問いかける。

「俺はそろそろ帰るぜ。一応一通りの事情は知つてゐるしな」リュックを担ぎ、「よいお年を」と言つと西村は店を出て行つた。

しかし、文香は残りたいらしい。霧矢も別に構ないので適当に座つて待つてもらつことにした。

「霜華、お前、今日は休んでいいぞ。たまには僕がやつておく」

霧矢の言葉に霜華は意外そうな顔をする。

もともと、霜華はこの家の居候なのだが、それではいろいろと不都合なので、薬局の店員としてアルバイトをしている。霧矢としては反対したが、母親にして店長にして薬剤師である理津子の評価は上々であり、町の老人や子供たちの人気もなぜかやたらと高く、薬局の看板娘として定着しつつある。

「いいの？ 霧君一人で？」

「別に土曜日にはそれほど客は来ない。もともと母さんだけでもこなせるくらいだ。この三連休の間はゆつくりしてもいいぞ」

隣の内科・小児科診療所では、平日こそ老人や小さな子供でごつた返しているが、土曜日は数人の成人の患者がいるくらいでそれほど混み合つたりはしない。

もともと、若者の少ない町であり、若者は医者にかかるときは、それなりに賑わっている隣町までドライブがてら行くことが多い。特に土曜日は帰りに大型量販店でゆつくりと買い物もできるのでなおさらだ。距離も十数キロメートルで、車ならそれほど時間はかかるない。電車なら一駅、十分ほどで行ける。まあ、その近さがこの商店街をますます寂れさせているのだが。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

ソファーに座りながら、待合客用の備え付けである雑誌を読んでいる文香に霜華は耳打ちする。文香はうなずくと、脇に置いてあつたコートを取つた。

「すまんが、出かけさせてもらつ。世話になつた」

文香は霧矢に頭を下げるが、コートを羽織つて外に出て行つた。霜華もそれに続く。

「おい、どこか行くのか？」

霜華は首を縦に振ると「晴代の家」とだけ答えて、そのまま店か

ら出でいく。

「……相変わらず、薄着で出かけやがつて」

霧矢はぼそりとつぶやいた。

霜華は氷使いで、しかも半雪女と自称するだけあって、寒さにはありえないほど強い。氷点下の中、薄手の着物やブラウス一枚にスカートで平然としているほどだ。

それはそれで利点なのだが、この寒い中、他人から見たら嫌でも目立つてしまふという短所もある。

「……まあ、いいか」

霧矢は新聞のページをめくつた。

「おじや ましま～す！」

霜華と文香がやつてきたのは、喫茶・毘沙門天の裏にある民家だった。

「ああ、霜華ちゃんと文香か。いらっしゃい。上がって」
表札には上川と書かれている。そう、晴代の家である。相当昔から建っている霧矢の家とは違つて、わりと新しい木造の家だ。

「霜華ちゃんがあたしの家に来るの初めてだよね？」

霜華はうなずく。キヨロキヨロと家中を見回すと、やはり霧矢の家とは違つて洋風のつくりだ。居間は、畳にこたつではなく、フローリングにテーブルだ。

「あたしの部屋は一階だから、付いてきて」

「晴代。きちんと片付けてあるのか？　この前、私が来たときはひどかつたのだが」

うつ！　と文香の言葉に晴代は固まる。少し焦ると、晴代は苦し紛れに言葉をひねり出した。

「えつと……十分だけ、リビングで待つてくれない？」

「やはりそうなのだな。予想はしていたが」

眼鏡越しに突き刺すような視線を向けられ、晴代はうろたえる。ドタバタと階段を上つていくと、乱暴にドアが閉まる音が聞こえた。「やれやれ……」

文香は腕組みをしながらため息をついた。いつものことなのだが呆れてしまうのは変わらなかつた。これもいつものことだが。

「晴代つて片付けられない人なんだね……」

「まあ、それを否定することはできない。昔は片付けを手伝わせるためだけに呼び出されたこともしょっちゅうだつたが。今は、少しはましになつた」

リビングの方に文香は歩き出す。霜華も続いた。

「ところで、私は昨日のことばよく知らないのだが、結局、リリアンの件はどうなったのだ？」

リビングのソファーに遠慮もなく腰掛けた文香は、霜華にも座るように勧めながら尋ねた。霧矢も文香に対してはあまり説明していなかつたようだ。

「えつとね。何とか追い返したよ。霧君がやり過ぎた感じもしたけど」

「三条はいつたい何をしたのだ。やり過ぎるとはいえ、相手は魔族だつたのだろう？」

文香はポケットから手帳を取り出した。やはりメモ魔は何でも記録したがるらしい。

「魔族じゃなくて、契約主だつたみたいだけど……えつとね、霧君が変な煙玉みたいなものを使つたら…トライアウマを呼び覚ましちやつたみたいで、パニックを起こして倒れちゃつた……」

リリアン・ローンというのは、霜華と晴代を狙つて襲つてきた女のことだ。昔、カルト教団に殺された家族の復讐をしようとして、協力者となる魔族や契約主を探していて、もはや自暴自棄になつて霜華たちを襲つてきた。

霧矢・霜華・有島の三人で退けたが、運が悪ければ、霜華は彼女と彼女の契約魔族、エドワード・リースを殺さなければならなかつた。

「おそらく、その煙玉は私が作つた催涙煙幕だ。三条に万が一の時は使えと預けておいたのだ」

「へえ。文香が作つたんだ。でもあれ爆発しちやつたし、何でできてたの？」

「爆発？」

文香がキヨトンとした表情を浮かべた。あくまで催涙ガスと煙幕の両用を用意したものであつて、殺傷用の爆弾を作つたわけではない。

「うん。黒い煙がもうもうと立ち込めたかと思つたら、リリアンが炎の剣を使つたら爆発しちやつた。それで霧君は思いつきり吹つ飛ばされたし」

「霜華が首を傾げながら文香に尋ねた。文香は手帳の数ページ前をめくつて考える。

「……なるほど。大体つかめた」

「何だつたの？」

「おそらく、煙幕に入つていた炭素粉と可燃性ガスの混合気体に、火の剣が引火して発生した粉塵爆発だろう。まさか、相手が煙幕の中で火を使うとは……予想外だつた」

手帳に書かれた煙幕の設計図を霜華に見せながら説明する。

「へえ、こつちの世界はそうやつて武器を作るんだ」

「まあ、基本的に人間は異能を使えない。だから自然科学に頼るしかない。そうやつて兵器も生まれてきたわけだが、殺し合いのためには科学が発展してきたというのは嫌な話だ」

「殺し合いか……」

霜華は暗い表情を浮かべる。文香は突然の霜華の悲しみの表情に困惑した。

「どうかしたか？　まあ、粉塵爆発を除けばこれで人が死ぬことはないが」

霜華は窓から外を見た。穏やかなこちらの世界は殺し合いが日常的に行われることはない。リリアンのように、たまに誰かが殺されたりすることもあるが、基本的には平穏な世界だ。

そして、霧矢は散々人を殺してきた自分でも、こつちの世界に居場所があると言つてくれた。昔、向こうが穏やかだったときにも、こつちの世界にちょくちょく遊びに来ていた。風華へのプレゼントを買ってあげたり、好きなものを買つたりしていた。

もつと早くこつちの世界に来るべきだつた。そうすれば、自分が手にかけてきた相手の数は、少しは減つていただろう。

そう考えると後悔が自分を襲う。殺戮は避けることができたので

はないかと。

「どうした。気になることでもあつたのか？」

文香が心配そうな声で霜華の顔を見る。彼女は霜華が多くの人を手にかけてきたということを知らない。知っているのは霧矢・有島・風華だけだ。

「何でもない。ちょっと疲れてるだけだから」

霜華の言葉に、文香はふむ、とうなずくとそれ以上は深く追及しなかつた。

外の通りを見ると、町の外れにあるスキー場へと向かうタクシーや徒步のスキー客が目立つ。この商店街はもともと温泉街で、山もあるので冬ならばスキー客でそれなりににぎわう。そのかわり、春・夏・秋はまさに田舎町そのものとなる。

ここ、浦沼とはそういう町らしい。山に囲まれ、田んぼが町を占める典型的な田舎町だ。

「今日はスキー日和だが、この日差しの強さだ。雪田になる人が出るかもしだんな」

文香も観光客を眺めながらつぶやく。純白の雪に反射された紫外線に目を焼かれるとかなり痛む。すぐに治るが治るまでが相当痛いと霧矢は前に話していた。霜華は半雪女であるが、スキーの経験はない。むしろ、雪の上でも土の上と同じくらいのスピードで走れるので必要もなかつたことが多い。

「晴代つてスキーが大好きなんだよね。この前、スキーウェアでうちに飛び込んできた」

「そうだな。中学校時代はスキーで晴代の右に出る者はいないとも言われたくらいだが…」

文香の話では、ゲレンデでの晴代の性能は異常らしく、空中一回転のモーグルも軽くやってのけるそうだ。

「もはや、晴代はスキー中毒と言つてもいい。週に必ず一回は滑ら

ないと禁断症状を起こす。リフトの駆動音を聞くと必ずついしてくるらしいな」

クスリと笑つて文香は冗談を言つた。居間の机の上に置いてある定期券のパスケースのよつたものをヒョイとつまみ上げた。

「やはりな。市内共通のシーズン券まで買つてある」

魚沢市内スキー場シーズン共通リフト券と書かれたカードの名前欄には上川晴代といふ署名がある。魚沢市は浦沼町や浦沼よりさらにド田舎なその他の村との合併を繰り返した結果、面積だけはだだつ広く、人口密度だけが極端に小さくなってしまった市である。

「それにして、浦高の冬課題の量は割と多いのに、スキーなどしている暇はあるのかどうか

「え……？」

「私ならば、今年中に終わらせられるが、先週の晴代の様子を見たのならわかるだろう。彼女には毎日かなりの時間を費やしても終わらせられるかどうか……」

文香はため息をつく。文香は学年で片手に入る秀才だが、晴代は下から数えた方が早い。ちなみに、霧矢は平均より少しだけ上である。

「まあ、何とかなるんじゃないのかなあ

「そう祈りたいが、毎回、長期の休みの終わりになると私が呼び出されるのはお約束となつていて。中一のころからずっとだ」

苦々しい顔を浮かべて、文香はリフト券を机の上に戻した。霜華は苦笑いする。

「それにも、晴代は趣味と勉強の比率を考え直した方がいいと私は思う。私としては三対七くらいが良いと思うのだが、今の晴代は九対一だからな」

「スキーだけにそんなに費やしているの？」

文香は言葉に詰まり黙つていて。霜華としてはなぜ黙つているのかは理解できなかつた。

「まあ、スキーだけじゃなくて、他にもまあいろいろな趣味がある

と、そういうことだ「

それ以上は聞かないでくれ、と文香は遮った。

「お待たせ。片付け終わったよ！」

晴代がドタドタと騒がしく一階から降りてきた。

「やつと終わったか。だから、あれほどきちんと部屋は片付けておけと言っていたものを」

「説教はいいから。さ、上がつて、上がつて」

文香の小言をさらりと流し、晴代はつきつきと一人を引き連れ階段を上つて行つた。

「ありがとうございました。お大事に」
霧矢は店から出でていく客に頭を下げた。時計を見るとそろそろ昼時だ。霜華を呼び戻そうと思ったが、おそらく、昼は晴代の家で食べてくるだろう。無理に呼び戻す必要もないと考えた。空腹は大したことなかつたが、昨日の疲れで体力はかなり消耗していた。
霧矢はカウンターに置いた冬休みの宿題を睨みつける。自分でリストを作つたが、一日五時間以上やらなければ、確実に終わらない量だ。

(……晴代のやつ、大丈夫なのか?)

文香と同じ懸念を浮かべながら、霧矢は英語の読解課題を開く。英字新聞の記事を全て訳して来いというふざけた内容だ。一通り眺めてみると、経済がらみの内容のようだつた。

「これはいじめだな……」

独り言をつぶやいていると、店の扉が開く。無精ひげを生やした男が入ってきた。

「いらっしゃいま……せ……?」

「おはよう。三條……」

「せ……先生……どうしたんです。こんなところに……」

この男は松原陽介といつて、県立浦沼高校の生徒会顧問で霧矢と晴代のクラスの数学を担当する教師だ。教え方や人柄は悪くないのだが、だらしない上に、年の割にはいろいろと親父くさいということで、生徒からの評判は良い意味であまりよろしくない。

「昨日からどうも調子が悪くて、隣で見てもらつたんだが……インフルエンザだと言われた」

霧矢は身構える。普通の流行性感冒は少し前にも引いたので免疫ができているが、残念なことに、今年はインフルエンザの予防注射をしていない。

しかも、あり得ないことに、松原先生はマスクも何もせずに薬局の中で咳をしまくっている。霧矢は顔をそむけながら、処方箋を受け取り、母親を呼んだ。

「インフルエンザはわかりますけど、何か先生酒臭いですよ」「昨日、休みに入つたつてことで、先生たちで飲み会だつた。飲み過ぎてまだ頭痛がする。しばらくの不養生がたたつたみたいだな」霧矢たちがリリアンとの死闘を繰り広げていたちょうど同じ時刻に、先生たちはのんきに酒盛りをしていたらしい。寒空の中、へべれけになつて帰つている途中に、インフルエンザが発症したということだろう。

彼はこの商店街の近くにあるアパートに住んでいるとだけ聞いたことがある。そして、この商店街のとある割烹は、浦沼高校御用達となつていて、地域の経済に先生たちは貢献している。

「自業自得ですよ。体調が悪いなら飲み会なんて行かなきゃいいんです。それと咳き込むならまわりにうつさないためにも、きちんとマスクをしてください」

さりげなく、霧矢はカウンターにマスクの箱を置く。商売上手め、とつぶやくと財布から小銭を出した。

「毎度あり。あと、アルコールが抜ける前に薬は飲まないでください。副作用が出ますから」

箱を開けてマスクをつけていると、理津子が店の方に出てくる。

「あらあら、先生。息子がお世話になつています」

「いえいえ、こちらこそ」

霧矢が出した薬を理津子はきちんと処方箋通りか確認する。霧矢は確認を受けて、薬を袋に入れていく。

理津子が松原に飲み方を説明するのを横目で見ながら、霧矢は換気扇のスイッチを入れる。先ほどの飛沫でうつされてしまつては、クリスマスが台無しになつてしまつ。備え付けてある消毒液を両手に念入りにこすりこんだ。

「ところで、うちの子、無事、薬学部に行けるのでしょうか？」

「霧矢の動きが止まる。成績のことを突かれると、霧矢としては返しょうがない。」

「数学に限つて言えば、今のところ、大学を選ばなければ可能でしょうね。でも、まだ一年生ですし、これから努力次第といふところでしょう？」

かすれた声で、そこそこましな評価をもらつた。霧矢は息を吐いた。

「三年生は、センター試験直前で忙しくなつてきてますし、霧矢君も三年生並とは言いませんが、そこそこ頑張つてもらいたいものです」

「……頑張る……か……」

「そうだ。頑張れ。すべてはお前の努力次第だ」

グーサインをすると、薬代を支払つて松原は出て行つた。

「ありがとうございました。お大事に」

理津子は再び、家の方に戻つていく。霧矢はカウンターに座り、英語の課題に戻つた。

(……冬休みか……こんなに宿題出されて休みとかふざけた話だな)
高校生とは割としんどいものだ。浦沼高校はどちらかといふと進学校で課題がやたらと多い。中学校の時も友達はみんな敬遠して、隣町の高校に行つてしまつた。浮かれて町で遊んでいる高校生を見ると、一抹の羨望があつたりするのだが、店の跡を継ぐためには、大学に行かなければならぬ。

もともと、この薬局は、もう一人とも亡くなつてゐるが、霧矢の父方の祖父母が始めたものだ。祖父は先代の隣の診療所の先生と旧知の仲だつたらしく、一緒になつて診療所と処方薬局を始めたそうだ。霧矢の父親は一人兄弟の弟で、兄は跡を継がずに家を飛び出してしまい、完全に絶縁状態となつてゐる。父親も大学の薬学部に行つたのはいいのだが、薬剤師になるよりも創薬の研究の方が好きになつてしまい、店を継ぐのを拒否した。結局、今や薬学部の准教授

で、現在、海外の大学で研究している。

父はそれで危うく勘当されかけたが、父親は祖父母に妥協案を提示した。

実は父、淳史は大学時代にある女性と付き合っていた。彼女も同じ薬学部だったが、研究職ではなく、薬剤師を目指していた。そして大学院を修了すると、二人は結婚した。つまり、理津子を跡継ぎにし、自分は大学での研究を続けるということを提示した。

祖父母も目的は後継者だったので、その案を受け入れ、結局、今のように理津子が薬局を仕切っている。そして、息子である霧矢は店の手伝いをしている、というわけだ。

（……しかし、何というか……いい天気だな……）

外を眺めれば、穏やかな日差しが路面の雪で反射され、キラキラと輝いている。しかし、週間予報によれば、この天気は長くは続かないらしい。明日からまた西高東低となり、日本海側は荒れてきて、大雪のクリスマス・イブになるらしい。

（……まあ、こんな田舎じや、クリスマスつつても大したことないしな……）

いい天気だというのに、表通りの人気はあるでない。もつとも霧矢の家とスキー場は駅前通りをはさんで反対の位置にあるので、こちらに観光客は来ない。

時計を見ると、隣の診療所が閉まる時間だった。霧矢は課題のノートを閉じて家に戻る。

「霧矢。結局、冬休みの宿題つてどれくらいなの？」

「聞かないでくれ。さつき嫌な気分になつたから」

一人で昼食をとりながら、霧矢はこたつ上の板とにらめっこする。霧矢の夏休みは地獄だった。しかし、期間が長かつた分、何とか終わらせることができた。しかし、この休みは短く、課題の量は夏休みと大差ない。

ふと思いついて、携帯電話を取り出し、西村にメールをする。

お前、課題終わると思つ？

ふう、と息を吐いて、霧矢は昼食に箸をつける。まあ、課題は多いとはいえ、冬休みは冬休みだ。楽しんでいこう。

「へえ、晴代つて結構料理上手なんだね」「晴代から料理とスキーを取つたら何が残るのか……私は恐ろしくて考えたこともない」

「悪かったわね。でも文香の料理なんて食べられたもんじやないし」
昼時の上川家では、晴代が家の台所を使つて昼食を作つていた。
喫茶店もそれなりに人が入つてゐる。店で働いている両親の分も晴代は作つて届けているらしい。

「晴代もダメだといふし、三条に至つては完全な拒否反応を示す。いつたい私の料理の何がいけないのか、ご教授いただきたいものだ」「文香は材料をこつちで用意すれば結構上手いんだけどね……自前で用意させると何を入れるかわからんないし」

これは霧矢と晴代しか知らないことだが、文香は料理をするとき、実験室で化学的に合成した調味料を入れることがある。ベンゼンからサッカリンを作つたり、アルコールとカルボン酸から硫酸を使つて香料を作つたりする。市販されているものなら良いのだが、彼女は一から作つてしまふ。しかし、途中のプロセスで加える化学物質の効果を考慮しないため、霧矢は彼女の作ったものを食べて死にかけたことがある。

文香は、料理自体は上手いのだが、変なものを入れてしまふのだから、文香に料理をさせるときは食材を誰か他の人が用意しておいた上で、見張つていなければならない。

「霜華ちゃんも上手だよね。割と手馴れてる感じだよ」

「まあ、風華の世話を私がしてたからね。両親はずつと行方不明で私が母親代わりだったから」

晴代と文香は意外そうな顔をした。

「あれ、霧君から聞いてないの?」

霜華としては、もうとつくの昔に霧矢が話していたものだと思つ

ていた。

「霧矢は、ああ見えて人の立ち入った事情を他人にはそう簡単には話さないからね。まあ、だから学校でもそれなりにみんなから信頼されてるんだけど」

「晴代の趣味も含めてだがな」

「あれは別。霧矢つたらいつもネタにして脅してくるし……」

晴代はイライラした顔立ちで乱暴にフライパンをかき回した。一人料理から外されている文香は暇つぶしがてらに上川家の冷蔵庫の中を覗き込んだ。

「晴代、ダイエットしていたとか聞いたが、糖分だらけだぞ」

ギクリと晴代の背筋が動く。

「何、人の家の冷蔵庫を勝手に漁つてるのよー！ バカー！」

半泣きになりながら、文香に抗議した。霜華は苦笑いしながら先ほど的话题に戻した。

「霧君にはもう話したんだけど、実は私、結構昔から親と会つていんだ。二人ともどこで何をしているのかさっぱり見当がつかないけど、それでも、まあ少し前までは風華と一人でまわりの人々に支えられながら、やつてきたんだよ」

文香は冷蔵庫を閉め、腕組みした。

「……向こうにいられなくなつたからこっちに来たのだろうが……それは何なのだ」

ふう、と軽く息を吐くと霜華は霧矢に話したこともう一度口に出した。文香の表情が曇つていく。晴代も黙つたまま聞いていた。

「それは、いろいろと難儀なことだつたな……」

「まあ、でも、もうこつちの世界なら安全だし。昨日みたいなこともよほどじやないと起きないだろうしね」

「私も、ケガが完全に治つていたら霧矢を助けに行けたんだけどね

……」

晴代はまだ治りきっていない腰をさする。

数日前に、雨野の暴走を止めようとして、晴代は実力行使に出た

のだが、完全に相手の実力を過小評価していた。見事に返り討ちにされ、全治五日間ほどの打撲を負ってしまった。今も晴代の体の背面には湿布が列をなしている。

霜華と二人、契約主とハーフの一人がかりで一人の普通の人間を襲撃したにもかかわらず、晴代は完全ノックアウト、霜華もあと一歩のところで倒されるところだった。このことからも、浦高の生徒会長の腕力は反則級であることをうかがわせる。

ちなみに、風華は彼女の物理戦闘力に惚れ込んでしまい、初対面にもかかわらず、霜華と同じくらい彼女になってしまった。

「完成！ まあ、みんなで食べましょ～！」

皿に盛りつけて、リビングのテーブルに置く。みんなで「いただきます」と言うと箸をつけ始める。

「うん。やはり晴代の料理は安定している」

文香がぼそりと褒め言葉を口にする。晴代は「もつと褒めてくれてもいいのに」と不満そうだ。もともと文香は感情を大っぴらに表現しないので、晴代としてはもう少し明るくなつてもいいんじゃないのか、とも思っている。

「霜華ちゃんのも結構おいしいよ。霧矢は幸せ者だねえ……」

晴代がわざとらしく、渋い顔をする。どうやら、一人の料理の腕はほぼ互角と言ったところだ。文香も霜華の作った料理を食べ、うんうんとうなずいている。

「そもそも、お昼のニュースの時間だねえ。ちょっと入れてみようか」

リモコンで晴代はテレビのスイッチを入れた。地元のテレビ局の中継が入っている。

『富内さん？ そちらの様子はどうですか？』

『はい。今日のアーケード街では、クリスマス・イブを明後日に控えて、デパートや専門店がクリスマスギフトやお歳暮の大商戦を繰

り広げています』

液晶の向こうでは、土曜日といふこともあって、子供連れの親子でにぎわっていた。防寒具に身を包んで街を歩く人の群れが、リポーターの後ろで行き交っていた。

「ふむ。今年もそれなりに活気づいているようだな。良いことだ」「よかつたね。でもさ、このアーケードってずっと前に事故が起つてなかつたつけ？」

晴代が文香に何のこともないひょうきんな口調で問い合わせたが、霜華はピクリと動いた。

「あれは本当に残念な事故だつた。亡くなつた人も多かつたはずだ」文香は悲しげな眼をしてコップの水を飲んだ。

「事故……つてまさか、ガス漏れの事故？」

「何だ。知つてるんじゃない。こっちの世界の事情にも結構詳しいんだね」

霜華はつい暗い表情になる。一人とも何かあることを察したようだ。

リリアンが復讐を誓つたのはあの事件がきっかけだつた。公式にはガスの漏出事故として扱われているが、実際はカルト教団が魔族の力をを利用して起こした無差別テロ事件だつた。8年前のクリスマス・イブに魔族の力の実験台として、東京ではなく、わざと中規模の地方都市を狙つて起こしたのだ。リリアンの家族はそれに巻き込まれて全員死亡した。

教団の力は強く、マスコミに隠蔽をかけた上、警察も魔族の力という非科学的な現象を前に何もできなかつた。犯人らしき男は見つかつたが、何の立証もできず結局無罪放免という結末だつたらしい。それすらも情報操作であまり知られていない。

そもそも、その教団自体が存在をほとんど知られていない。霧矢や有島すら知らなかつた。しかし、裏世界の情報筋を駆使して、リリアンはあの事件の真相にたどり着いた。

そして、明後日、事故が発生したまさにその時刻に復讐として、魔族の力を用いて、教団の関係者を始末すると宣言した。

霜華としては、殺しに嫌悪感を抱いているため、あまり賛成できなかつたし、協力も拒否した。その結果、昨日の騒ぎになつてしまつたというわけである。

しかし、つい数時間前に、リリアンの契約魔族、エドワード・リースは、あの教団がまた何か犯罪を企んでいるという情報をつかんだと語っていた。そして、その防止のために彼らを殺しに行くとも。霜華としては、もはや殺しは嫌なのだが、彼らが何かを企んでいるから罪なき人を守るために殺すというのを否定する資格はない。彼女も風華や仲間を守るために何百何千という敵を殺し続けてきたからだ。

「へえ、あの事件つて事故じゃなくて、犯罪だつたんだ……」

晴代が険しい顔をする。手で握っている湯呑み中のお茶が熱せられて沸騰しボコボコと音を立てた。文香も犠牲者に黙祷するように目を閉じている。

「私たちは、あの時まだ小学生だつたから、はつきりと覚えてはないのだが、外人の死亡者はいなかつたと思つただが……」

文香や晴代はリリアンを直接見たことはないので、名前から外人だと思つていてるようだ。

「彼女はどう見ても日本人だよ。日本語も流暢に話すし、明らかにあれは偽名でしょ。復讐者としてのね」

「そうなんだ……」

「無差別に狙われて家族を皆殺しにされたのだ。復讐したいという思いを責めるのは酷というものだ。私としては称賛できんが、批判もできんな」

文香がお茶をすすりながら遠くを見るような目つきでつぶやいた。「しかし、連中がまた何かでかすかもしないというのは恐ろしい話だ。止めるために殺すというのもまた恐ろしい話だが……」

「でもさ、警察が入つても権力がらみでダメになるし、何かしでかしたところでまた無罪放免になっちゃうだけだし……」

晴代も困った顔を浮かべている。

三人ともため息をついた。

「よかったです。無事、明後日には退院できるそうで、浦沼から電車で一時間弱、人口三十万人ほどの地方都市では、三人の女の子が町を歩いていた。一人は高校生ほどでもう一人は小学生から中学生くらいだ。

「…………どうかしましたか？」

セミロングの髪に優しげな顔立ちをしている女の子は、吊り目のショートカットの女の子に心配そうに声をかけた。

ハツとして、彼女は我に返った。

「……ああ、私って今、幸せだな……ってね」

一コリと微笑みながら、雨野光里は有島恵子に返事をする。彼女の左手を握っている女の子、北原風華に「ありがとう」と言った。

雨野光里の弟である雨野護は、何者かにかけられた呪いと自身の契約異能の効果が不運なことに相乗効果を起こし、長い間眠り続けていた。その後、雨野家は両親が不和となり、彼女一人だけが家で暮らし、両親は別居しているという事態になってしまった。

彼女は呪いを解こうと奔走し、糺余曲折の後、偶然ではあつたが風華と出会い、契約。発現した契約異能の解呪・癒しの風を操り、無事に護の呪いを解くことができた。

そして、今はその病院の帰り道である。霧矢と霜華は店があるからと先に帰ってしまい、三人で電車が出るまでの時間、駅ビルの中をうろついていた。

「やっぱり、クリスマス前だけあつて、人も多いですね」

駅ビルの中は、クリスマスソングが流れ、テナントもクリスマスツリー やモールで覆い尽くされていた。コートに身を包んだ家族連れが楽しそうに服や贈答品を選んでいる。

「今年は、去年のクリスマスがアレだった分、少しは楽しめそうか

な

「護君が退院しますね。ただ……」

有島は言葉を濁す。雨野は氣にもせず言葉を引き取つた。

「親がすぐに戻つてくる可能性は低いかな。ただ、一人だけでも楽しいと思つけど」

笑みを浮かべながら息を吐いた。有島も微笑む。

その時、雨野のポケットが振動した。携帯を取り出すと、画面には役立たずの方の副会長の番号が表示されている。

「はい、私よ。何か用？」

「西村から聞いたぜ。やつと問題が解決したんだってな」

「雲沢。あんたそんなことを言つたためだけに、私にかけてきたつてわけ？」

電話の相手は雲沢誠也といい、県立浦沼高校の副会長である。が、役員としての器量は、下級生である霧矢や西村と比べてはるかに劣る。ただし、肉体の再生力だけは半端でなく、ターミネーターのごとく雨野の攻撃を受けてもすぐに回復し、生徒会室から追い出されても確実に戻つてくるのである。

「まあ、そう言つなつて。それなりにそれはそれでおめでたいことじやねえか」

「あんたに祝われたくないわよ。幸せが逃げていきやう」

「ぐ。言つてくれるじやねえか。その毒舌に乾杯」

「今度こそあの世に送られたい？ あんたの知能はサル以下だけど、野生動物だつたら人間以上に危機回避本能があるはずだけど？」

電話越しにソフトな暴言を吐いている雨野を通行人は避けている。脇に立つていてる有島は居心地が悪そうに苦笑いを浮かべていた。

「風華ちゃんはおなかとか空いてないですか？」

話している雨野を横目で見ながら、有島は問いを発した。

おずおずと、うん、とうなづくと、有島はにこりと笑いで返した。風華も有島には同じハーフ同士で何となく氣も通じているのだろう。「とにかく！ これ以上いちいち電話をかけてくるんじゃない！」

メールでいいから！

息を巻くと、雨野は電話を切った。イライラした表情でため息をつく。

「雲沢君ですか？」

食卓にあれほど出さないでと言つたものが出てきた時のような顔で雨野は首を縦に振つた。

「それよりも、風華ちゃん、おなかが空いてるようです。どこに入りませんか？」

賛成、と短く答えると、雨野は風華の手を引き、喫茶スペースのあるパン屋に入った。

パンと飲み物を買い、三人は席に座つた。

「ところで、私はよくわからないのですが、護君はいつたい誰と契約したんですか？」

カプチーノに口をつけながら有島は質問する。

有島と風華は水を差すのも悪いと思って、雨野が帰ると言い出すまで護の病室には入らなかつた。一人とも最後に一度だけ雨野に紹介される形でいさつしたが、それ以外は護とまるで話していない。

「えつと、闇の魔族でユリア・アイゼンベルグとか言つてた」

「闇のユリア・アイゼンベルグ……どこかで聞いたことある名前のような気がする……」

風華が思い出すような顔つきで声を出した。戦いのときはともかく普段は、どこか子供っぽい一面のある霜華とは違つて、風華は何となく思慮深いイメージを醸し出している。

「聞いたことあるの？」

「でも、どんな人か思い出せない。どこかでうわさを聞いた気がするんだけど……」

「コッペパンをちぎつて口に入れる。頭を振ると、

「これ以上は考えても多分思い出せない。それよりも、何でその人は契約主を放つて、行方をくらましてるのかわからない」

残念そうな口調で風華はかつて姉が抱いた疑問と同様の問いを発する。

「私もそう思います。基本、契約魔族は契約主と近い関係にある方が都合がいいはずです。それなのに、どうしてずっと離れているのか……」

「でも、契約が自然消滅してないってことは、お互に信頼はあるわけでしょ？」

ミルクティーをすすりながら、雨野は首を傾げる。

「ええ。お互いの信頼は続き、しかも、まだ彼女はこちらの世界にいる。まあ、いろいろ聞いた話では、向こうに戻るのは相当危険なことでしょうが……」

風華は残念そうにうなづく。今向こうには虐殺が現在進行形で繰り広げられている。

「護の契約魔族は、何のためにこっちに来たのかよくわからない。向こうが大荒れになつたのは護が倒れてしばらくした後のころだから、私たちみたいに戦いから逃げてきたわけじゃないと思う。でもそれだったらわざわざ魔力切れを起こす危険と隣り合わせなのに、何でこっちの世界に来たのか、と私は変だなって思う」

氷の入ったオレンジジュースをストローでかき回しながら風華は続ける。

「多分、今私が思ったことは何かの核心につながつていると思つ。でも、嫌な予感もする」「嫌な……予感……ですか？」

不安そうな表情で有島は風華の顔を覗き込んだ。

「何となくだけど、またそれで誰かが亡くなつたりしそうな気がする……」

初めは「冗談だと思つたが、雨野も有島も風華の声から本気でそう思つてはいるのだとわかつた。昨日まで修羅に身を置いていた子だ。流血の予兆については敏感で当然かもしない。

「まあ、契約魔族がどうであれ、呪いが解けたのならそれでもうい

いと思いますよ。別に契約を意図的に解除しなければダメージを負うこともありますんし」

「……ユリア・アイゼンベルグねえ、どこの誰なのか……」

フレンチトーストにナイフを入れていい雨野はひねり出すような声を出した。

いずれにしても、まだまだよくわからないことは多かった。

課題が終わる見込みは、多く見積もって二割くらい。きっと終わらない（涙）

霧矢が振動した携帯電話を見ると、西村からメールの返事が来ていた。霧矢も取り組んでいたのだが、課題の総量を冬休みの残り期間で日割りにしたら、余計に気分が沈んだ。

正直、先生は鬼だ、と。

（こんなもん、終わらせられるのは木村くらいだな……）

プリントを一枚終わらせると、霧矢は参考書をレジカウンターの上に放り出した。

目を閉じてしばし休憩する。まぶたの裏には昨日のリリアンの姿が浮かんできた。

（……結局、何がやりたかったのかはつきりしないな……復讐したいあまり、脇が崩れてしまつたと言うべきか……）

心地よい疲労感が眠気を誘う。霧矢はあくびをした。

昨日は西村のいびきのせいでほとんど眠れなかつた。無理やり疲労をこまかしてはいたが、やはり来るものは来た。昼食を取つたばかりということもあって、睡魔に抵抗するのはきつかった。しかし、敢えて睡魔に抵抗する必要もなく。霧矢はなるがまま身を任せた。すぐに、薬局の中は寝息の音以外何も聞こえなくなつた。

それが数分間続いたのち、いきなり薬局の扉が開いた。飛び起きるようにして、霧矢は客の顔を見る。

「いらっしゃいませ！」

田をこすりながら、入ってきた人を見ると、身長一八〇センチほどの黒のスーツを着込んだ短髪の二十代初めくらいの男だった。

「三条霧矢だな？」

「は……」

「時間はあるか？」

いきなり妙なことを聞かれ、霧矢は狼狽する。時間ならあるが、いきなり初対面の相手に何か聞かれても即座に答えられるわけがない。

「え……ええ……」

男は懐から、写真を取り出した。

「申し遅れた。俺は、塩沢雅史という。とある探偵の助手だ。この少女の行方について追っている。知つていたら教えてほしい」

霧矢は写真を受け取つた。流れるような金髪で、外見年齢は霜華と同じくらいで十代前半の女の子だ。しかし、霧矢はそんな子は見たことはない。

「何で名前の子なんですか？」

「名前ははつきりしない。身元もだ。だから俺たちは動いている」「重く厳しい口調だが、敵意というものはない。じついうつ調の持ち主なのだろう。

「知りませんね。僕に外人の知り合いはいませんし」

「では、北原霜華は今、ここにいるか？」

「今はいませんね。友人の家に出かけています」

「その友人とは上川晴代、もしくは雨野光里、有島恵子のことか？」霧矢は警戒心を抱いた。明らかに、探偵ということを考慮しても知り過ぎているような気がする。それに、そのメンバーの羅列は明らかにある一点を明示している。

「その子、魔族か契約主なんですね？」

「……そうだ」

「何があつたんです？」

「君が知る必要はない。ただ彼女について何か知つていることがあれば教えてほしいと思ってここに来た。北原霜華はどこにいる？」

霧矢は少し苛立つた。いきなり「君が知る必要はない」と言われば立ちまぎれに、

「僕が彼女の事情について知る必要がないなら、あなたも霜華の居

場所を知る必要ないと僕は思います」

と挑発的に答えてしまう。塩沢は息を吐くと、霧矢に詰め寄った。
「君に得があるかどうかではない。これは下手をしたら人の命に関わる。エドワード・リースから話は聞いているはずだ。やつらが、また何かしでかそうとしていると！」

霧矢は、エドワード・リースという名を聞き硬直する。

「リリアンの仲間の探偵ってあなたたちのことだつたんですね？」

しばらく逡巡していたが、塩沢は首を縦に振つた。

「……この話は軽々しく、誰かに話すことはできない。漏れてしまつたら、君たちが狙われることにもなりかねないからだ。だが、彼女がそれに関係している可能性がある。だから、少し前までむこうにいた魔族の意見を聞こうとここを訪れた」

霧矢は渋々、携帯電話を取り上げようとした。しかし、塩沢は待つたをかけた。

「電話ではなく、直接会つて話がしたい。北原霜華はどこにいる？」
霧矢はため息をつくと、母親に出かける旨を伝え、エプロンを外した。

「仕方ない。ついてきてくれ」

「いらっしゃいませ！ て、あれ、霧矢君じゃない、あれ、隣は親戚のお兄さんとか？」

「いや、ちょっとした用事だ」

喫茶・毘沙門天は昼時も過ぎ、さほど人は入っていなかつた。
「すみません。晴代と霜華を呼んでもらえますか？」

「はいはい。ちょっと待つててね」

晴代の母親はコードレスの内線ボタンを押し、晴代を呼び出す。

塩沢は淡々とした口調で、ブレンンドとだけ頼んだ。

「……エドワードは復讐の件で僕たちにはもつ関わらないと言つて
いたはずなんだが……」

ぶすっとした顔つきで霧矢は不満を口にするが、意にも介さず、
塩沢は外を眺めている。大物の雰囲気はあるのだが、人を怒らせやすいタイプだと霧矢は感じた。

「……話聞いてる？」

「聞いている。ただ、答えるかどうかは俺が判断する」

霧矢には目もくれず、ただ、帰りのスキー客が道を歩いていくの
を彼は見つめていた。霧矢はイライラするのを抑えて、霜華たちが
来るのを待つた。

「お待たせ。どうしたの？ わざわざ」

「どうしたも、こいつしたも、こいつがお前に聞きたい話があるんだ
とさ」

奥のテーブルに、文香、霜華、晴代の三人が並んで座る。塩沢は
文香を見ると疑問の表情を浮かべるが、気にすることなく始めた。

「まず、自己紹介と行こう。俺は塩沢雅史。相川探偵事務所の助手
だ。魔族がらみの事件を調べている。今日は聞きたいことがあって
ここに来た」

一枚の写真を三人の前に出す。

「この写真の女の子、魔族なんだが行方をくらましていく、しかも名前ははつきりしない。心当たりはないか？」

霜華は写真を受け取り、思い出すような表情を浮かべる。

「……どこかで見たことはある気がするな……でも、知り合いじゃない」

「見たことがあるなら十分だ。属性や特徴、どんなことでもいい。知つていたら教えてくれ」

「……イメージ的には土つて感じがする……でも、それ以上はわからぬいな……」

塩沢は、残念そうにうなずくと写真をポケットにしまった。

「塩沢さん、あなた魔族でも契約主でもないよね。だつたら、このクリスマス・イブは暇じゃないの？」

霜華がいきなり質問をかけた。塩沢は面白そうな表情を浮かべた。「なるほどな。リリアンがどこまで話したのかは知らないが、ある程度の情報は知っているようだな」

「コーヒーの香りを味わいながら、塩沢は目を細めた。

「まあ、俺は契約主じゃない。異能も持っていない。ただ、まあコンタクトに魔力分類器を仕込んであるから、魔族、契約主とその他の人間の区別はできるけどな」

しばらく沈黙が流れたが、文香が口火を切った。

「……探偵の助手と言つたな。だが、貴様から感じられる雰囲気は探偵の助手ではない。殺し屋、裏世界の人間のにおいがする」

全員が文香を見つめる。塩沢はニヤリと笑うと、

「ご名答。相川探偵事務所とはいって、実際は異能を使った何でも屋だ。ただし、それは魔族由来に限らない、人間の突然変異と言つてもいいけどな。もっとも、俺たちが気に入らない依頼は受けないが。今はリリアンの依頼を受けて、うちの異能組は明後日の準備で忙しい。だから、暇な俺がこの仕事を頼まれた」

まわりに人が誰もいないのを確認すると、塩沢はズボンのベルト

から何かを取り出した。

「！」

全員がビクリと身を震わせた。大口径の軍用拳銃が日の光を反射して光る。

「こいつは本物だ。そちらのヤクザが持っているようなものとは格が違う。俺は人身売買組織や麻薬の密売組織とこいつで渡り合ってきた。異能を持たない探偵メンバーとしてな」

ベルトのホルダーに戻す。

「安心しろ。こんなところでカタギ相手に使うほど、俺は人命を安っぽく思つてはいない。後、通報したところ俺は別にどうつてこともない。好きにすればいい」

自慢する口調でも脅迫する口調でもなく、淡々と事実を述べる口調だ。霧矢は尋ねる。

「それで、教団は何をしようとしてるんだ？」

塩沢は黙つていたが、意を決したように話し出した。

「君らに聞こう。これを知つたことによつて連中に狙われることになつたら、自分で自分の身を守れるか？ 家族が殺されたりしても耐えられるか？」

脅しじやない、と塩沢は付け加えた。

全員黙つてしまつ。エドワードも教団は残忍な手口を容赦なく使うと言つていた。このような状況で自分やまわりを危険にさらしかねない情報を得ることは、リスクの方が高かつた。

「ど、言つわけで、俺は話さない。あくまで俺たちは俺たちが良かれと思つことの下で動いている。一般人に危険が及ぶのはそれに反する」

最後に、リリアンと同じように電話番号を書き込んでいく。

「写真を一枚置いて行こう。何か彼女についてわかつたことがあつたら連絡してくれ」

おもむろに席から立ち上がる。

「ああ、それと、ここにコーヒーはこれまでの出会つたコーヒーの

中でも指折りの味だった

机に代金を置くと、そのまま店を出て行った。

「何だったの？」

「僕に聞かないでくれ」

霧矢はせっかく面倒事が解決したのに、また変なことに巻き込まれかけているということでかなり落ち込んでいた。

机に顎をくつつけ霧矢は水平面から金髪の女の子の写真を見る。脇には十一ヶタの数字の羅列が書かれた紙片がある。同じことは繰り返すというが、それが事実なら、また霧矢は面倒事に巻き込まれてしまうことになる。

Hゴイストをやめてやるとは言つたが、それは今回のリリアンがらみの事件に限つたことであつて、それが解決した今、もう、さつさと元の面倒事からは徹底的に距離を置くHゴイスト生活に戻りたかつた。

それだといふのに……問題が解決してから数時間しか経つていないのにこの始末だ。

（……不幸な目に遭うもんだ……）

写真をつまみあげながらため息をついた。

「それにしても、あんな大きい拳銃を持つてるなんて……」

晴代が恐る恐るといった口調で霧矢に話しかける。文香もややびっくりしたようだ。確かにここにいる全員が本物の拳銃を直接見るのは初めてのことだった。

「もういいだろ。穢やかなクリスマスを過いだそりば……もつたくさんだ」

「……まあ、そうだね」

「そうだ。これ以上関わつたらきっとろくな目に遭わないぜ。それよりはもう知らん。ふり決め込んでもうつくりしたい。宿題だつてともない量出でるし」

霧矢は机から顔を上げると、疲れた表情で外を見た。冬だけあつ

て日も短く、太陽は相当西側へ動いていた。

「ところで、雨野先輩はまだ戻ってきてないわけ？」

「なしのつぶてだ。もしかしたら、また変なことに巻き込まれてるんじゃないのか？」

「縁起でもないことを口にするな。これ以上変なことがあつたら手に負えん」

霧矢はポケットから携帯電話を取り出す。正直な話、リリアンの攻撃を受けて地面に叩きつけられたりしたが、よく壊れなかつたものだと思う。値段は張つたがそれなりに頑丈なものを買っておいてよかつたと内心では思つていた。

画面から雨野光里の項目を選び、霧矢は通話ボタンを押す。短い電子音が鳴ると、やや機嫌のよさそうな声で電話に出た。

「もしもし、会長ですか。三条です」

「何か用？ もう少ししたら電車に乗るから、用件があるなりとつて」と言つて

「いや、面倒事に巻き込まれてないならそれでいいんです。帰つてきたら、風華を連れて、喫茶・毘沙門天まで来てくれますか？」

しばらぐ話すと、珍しいほど明るい声で了解、と言い、雨野は電話を切つた。

「どうだつた？」

「これから電車に乗るつてさ。そのうち来るだ」

晴代は店に貼つてある、地元の時刻表を見る。うきつきとした表情で「あと五十分」とつぶやいてくる。そんな彼女を横目で見ながら、

「なあ、木村。晴代は課題終わると思うか？」

小さなヒソヒソ声で霧矢は姿勢を低くして尋ねた。

「私は無理だとは言わない、そこは友を信じたい。しかし、厳しいとは思う。残念ながら」

顔をしかめて、文香はゴロゴロ声で霧矢の耳に返事をした。

横を見ると、アホ女が楽しそうにモップをかけている。お気楽な

女がある意味うらやましい。霜華は塩沢の持った写真を何かを思い出そうとしている表情で見ていた。

「どこかで見たことがあるんだよ?」

「もういい。これはほっとけ」

霧矢は写真を取り上げ、ポケットにしまった。塩沢の電話番号のメモ用紙も同じくしまった。

「しかし、あと一時間ほど何して過ごす?」

「課題をやるべきと私は提言する。晴代、参考書の貸し出しとルーズリーフを何枚か所望する。それと、晴代もやることを勧める」

眼鏡を光らせながら、文香は晴代をにらみつけた。晴代は一步引く。

「了解。じゃあ、勉強会つてことでいいな。ひとつ走りして宿題取つてくる」

霧矢の家と晴代の家は往復しても五分かかるか、からないかくらいのすぐ近くの場所にある。霧矢は喫茶店から飛び出した。後は女子三人組が残された。

「ねえ、文香。何でせっかくいい気分なのにそりやつて水を差すの?」

晴代が口を尖らせて文香に食つてかかるが、文香は苦々しい顔で晴代の頭を殴る。

「中学校の時から私はいつも長期の休みになると付き合わされた。今年こそはそれがないことを望んでいるからだ!」

「はーい……」

不承不承、晴代は不満そうな声で返事をした。三人で喫茶店から家の方に戻り、机の上に問題集が並んだ。

「結構多いんだねえ……浦高って」

「そうだよ……先生はイジワルとしか言いようがないのよ」

わざとらしく涙ぐむ。文香はため息をつき、ルーズリーフを取り、

参考書を開いた。

「まったく、この程度で先生をイジワルなどと呼ぶのはいたしか、私からしてみれば、甘いとしか思えないのだが」

課題の範囲のページをパラパラとめぐり、文香は呆れたようになつぶやいた。霜華も問題集をめくつてみると、それなりに簡単といつ感想を漏らした。

「ちょっと、二人とも何でそんなにあたしを傷つけるようなことを言うのかなあ……」

晴代が泣き言を言つていると、課題の入つた袋を持った霧矢が上川家の居間に入ってきた。

「相変わらず、綺麗な家だな……」

「霧矢あああ！ 一人があたしをいじめるんだよおおお！」

「だ・ま・れ！ だつたら口頃の自分の暮らしを見つめ直せ！」

「霧矢までそんなことを言つわけえええ？」

四面楚歌、いや、三面楚歌の状況で晴代はノートを開いた。霧矢は今更になつてあることに気付いた。

（……霜華の子供っぽさやアホさに早く慣れることができたのは、こいつの存在が大きいな。こいつの方がはるかにヒドイ。こいつに慣れてしまつっていたからだ）

霧矢も椅子に座り、教材を開く。

「それじゃ、会長が来るまで勉強会スタートだ。とりあえず、お前は僕たちに頼る前に、自分で何とかする習慣をつける」

霧矢の言葉に文香も霜華もうなずく。晴代は暗い表情で渋々同意を示した。

全員が黙々と課題に取り組んでいる中で、霜華は適当に公民の教科書を読んでいる。こちらの世界のことをそれなりには知っているとはいえ、まだまだ世間のことには疎かつたらしく、興味深そうな表情を浮かべていた。

「ねえ、文香……」

「何だ」

開始三分にして、さつそく質問が始まった。文香は身を乗り出して、晴代のノートを覗き込んだ。しかし、表情が固まる。

「Jの問題のどこがわからないと言うのだ」

「ねえ、そんなわかつて当然みたいな口調で言わないで。あたしは本当にわかんないんだって」

ぐじくどと説教しながら文香は説明していく。霧矢も覗き込んでみるが、明らかに基礎中の基礎問題だ。解けない方がどうかしている。

全員がため息をつく。晴代の成績はここ数日うちに急落してしまったらしい。いや、もともと下がりようにもそれほど下げ幅を残していなかつたので、急落という表現はおかしいかもしれない。しかし、この状態を危機と思わない晴代もある意味では大したものだつた。

「ねえ、逆に聞きたいんだけど、何でみんなはそんなに勉強できるわけ？」

霧矢に対しては多少嫌味だが、霧矢の成績は学年平均より少し上で、晴代よりは格段に上だ。その少しだけ上に西村、学年トップクラスに文香がいる。そして、霜華も高校でやつてている内容は普通に理解していたようだ。

「普段の積み重ねだ。お前が授業中下らん妄想にふけつたり、家でつまらん趣味に時間を費やしたりしている間、みんなはちゃんと勉強してたんだ！」

ビシッ！ と晴代に霧矢は指を突きつけた。文香もうんうんとうなずいている。

晴代は言い返せず黙つたまま、次の問題に進んだ。

そのまま、問題を解き続けていると、上川家の呼び鈴が鳴つた。晴代が応対に出ていく。

「きやー！ 何てかわいい子なのー 抱きしめたーい」

晴代の黄色い声が玄関の方から響いてくる。霧矢は机に突つ伏し

「面倒事ばかりめんなんだ……せつぞく元の生活に戻してくれえ……」
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4900z/>

Absolute Zero 2nd

2012年1月8日22時52分発行